広島大学附属三原学校園研究紀要　第２集　2012　pp. 107-112

図画工作科

意欲・関心を高めることで，自分らしさを表現する指導の工夫

—粘土による造形活動を中心に—

吉　川　和　生

１，はじめに

本年度から新しい学習指導要領が完全実施された。その中で「思考・判断し表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること」や「生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむこと」が重視されている[1)]。この目的を達成するために領域や項目などを通して共通に働く資質や能力を整理したものとして〔共通事項〕が示された。〔共通事項〕の解説のなかで，児童の造形活動については「児童は，材料に触れて形の感じや質感を捉えたり，材料を見つめながら色の変化に気づいたりするなど，直観的に対象の特徴を捉えている。同時に対象や自分の行為などに対して自分なりのイメージを持っている，そしてこれらを元に発想や構想，創造的な技能，鑑賞等の能力を働かせて，具体的な活動を行っている。(中略)」[2)]と述べられている。ここには対象とのかかわりの中での偶然的な気づきだけではなく，ある程度の自発的な働きかけによる対象とのかかわりがあり，これらが思考・判断の基盤となることが示されている。自発的な働きかけを行うには，題材への興味・関心・学習意欲が必要である。本研究では，昨年度の研究[3)]で明らかになった情意面での課題から，この視点にポイントを絞って進めていく。

２，研究の構想

(1) 昨年度の研究から

昨年度の研究から図１に示した壁２・３に対する指導の工夫により児童の知識・理解や技能に対する苦手意識の克服が可能になった。表１に示した認知領域・精神運動領域・メタ認知領域では，アンケート結果から平均値の向上が見られた。しかし，情意領域の平均値は下がっており，ここに課題があることがわかった。そこで本研究では情意領域に絞って研究を進めていく。

(2) 造形表現の過程とつまずき

造形表現の一般的な過程は，「①課題（テーマ）への理解をする②表現意欲を持つ③表現へのめあてを持つ④構想を立てる⑤表現をする」[4)]とされている。これにもとづいてどこにつまずきがあるのかを示したのが図１である。課題設定から作品に仕上げるまでに３つの壁があると仮定し研究を進めている。

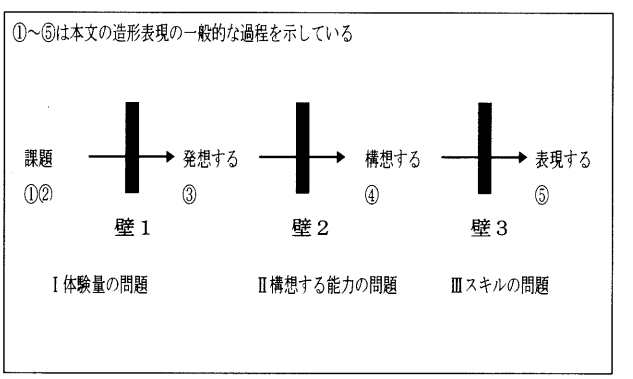

図１　造形表現の過程とつまずき

(3) 評価の指標

クラスウォールらによって提唱された新タキソノミーをもとにして中村ら（2010）は認知領域・精神運動領域・情意領域の３領域に加え，価値の形成の側面として「メタ認知」を上位においた４領域で目標群を設定している[5)]。本研究ではこれにもとづいて実践している。

表１　「新タキソノミー」を基盤とした図画工作科・美術科の目標群

	知識の次元	認知プロセス次元		総合的な次元
		1　想起する/理解する	2　応用する/分析する	3　評価する/創造する/内面化する
認知領域	事実的知識（重要語句・造形要素）	記憶から重要語句や造形要素を拾い出し，文脈の中で使う。	作品をよく見て，作品中に使われている重要語句や造形要素を説明的に使う。	重要語句や造形要素を使って作品論評をしたり，制作計画を立てたりする。
認知領域	概念的知識（題材の主たるテーマのコンセプト）	主たるテーマの概念規定を説明する。	作品がテーマの概念をどのように表現しているか確認する。	作品を論評したり，自らテーマに即した制作を行ったりする。
精神運動領域	手続的知識＝技能（ステップバイステップによる技術習得・美術批評の方法の理解）	技法・技術を理解し習得する。 芸術批評の方法を理解し習得する。		技法・技術を創作に応用する。 芸術批評の方法を作品批評に応用する。
	感情の 次元	情意プロセス次元		
		1　受容する/反応する	2　価値づけをする	
情意領域	自然的感情（興味・関心・態度・適応）	美的現象に注意を払い，何らかの反応をする。	美的現象に特定の価値を認め，その価値が自分にとってどういうものかを吟味する。	好みを大切にしながら，その「好み」と「人としてより良い在り方」の共通点や差違を確認する。
情意領域	価値形成的感情（真価への傾倒・意志・価値観）	美的現象に対し自己の持つ何らかの価値観に照らし合わせて興味・反応を示す。	美的現象から自分にとって大切だと感じる特定の価値を抽出する。	創造的活動を通して，自らが大切だと感じる価値とは何かを確認する。
	メタ認知の次元	1　知識のメタ認知	2　感情のメタ認知	
メタ認知	芸術家や鑑賞者としての立場による自己客観化の心的作用	芸術家や鑑賞者の立場に立って，自己の認識のありようを見つめ，改良するべき特定の部分を認める。	芸術家や鑑賞者の立場に立って，自己の感情のありようを見つめ，感じ方の特徴を理解し個性として把握する。	自己の作品から，自身の成長が現れている部分を特定し，批評する。特定した部分を，今後自己の価値観の一部として内面化する。

(4) 造形表現の過程と各領域の関係

造形表現の過程と各領域とのかかわりを図２に表した。１つ目の壁は情意領域にかかわる。２つ目の壁は，主に認知領域とかかわる。３つ目の壁は，主に精神運動領域にかかわる。もちろん，実際の造形表現においては，近接する過程において互いに行き来すると考えられ，各領域もその行き来によって相互にかかわってくると考えられるが，ここではそれぞれの壁に主にかかわるものにのみ焦点を当てる。

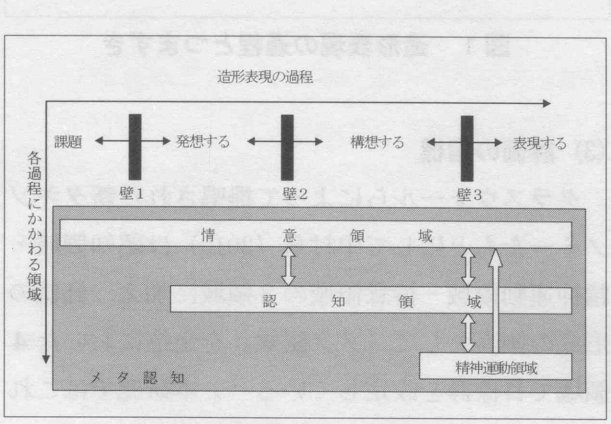

図２　造形表現の過程と各領域とのかかわり

(5) 具体的方策

①活動までに題材に関連した題材を意図的に行う

本研究では粘土を題材として研究を進めていくが，４月の粘土に関するアンケートで粘土が苦手な児童が 18％と２割近くいることがわかった。また，粘土造形の際に何らかの困難を抱えている児童も 89％にのぼりこれが意欲低下の原因の一つになると考えた。これを克服するために関連した活動を行う。

②イメージマップをつくりイメージを広げる

題材に対する何となくのイメージを図にして可視化していくことで具体的なものにするとともに，関連するものを書き込んでいくことでさらにそれを広げていくことができる。

③題材について調べる活動を行う

活動を行う前に題材に関する情報を集めるなどの調べる活動を行う。その活動を通して題材に関するイメージを持つことができるようにするとともにこれから行う制作活動に対する具体的な見通しを持つことができるようになると考える。

④目標を自分で設定して活動に取り組む

「○○な動物」や「○○なダルマ」というように○○にあたる部分を自分で設定することによって色・形などの造形要素に着目した活動を意欲的に行うことができると考えた。

(6) 実態把握及び変容の分析

研究の検証にあたっては，アンケート結果を分析することで検討していくこととする。

アンケートは情意領域にかかわる７項目で作成する。このアンケートを単元の前後に行い，事前と事後の変容を分析し，研究の妥当性について考察する。

３，実践例

(1) 単元

「○○な焼き物ダルマを作ろう」

(2) 授業・調査対象

第２学年１クラス，38 名

(3) 授業実施期間

10月～12月

(4) 本題材の位置づけ

本題材はこれまでの粘土による造形活動で学習したことをもとに焼き物用粘土を使って実際に焼き上げる活動である。これまでの油粘土や土粘土とは違い焼成の過程を経ることで最初の質感とは全く別のものになることを味わうことができる。

表２　本題材との関連

月	題材名	材料・用具等
5	土って気持ちがいい	畑で水や気を使って掘る・固める
9	ひみつのグアナコ	油粘土・粘土板
10	森の運動会	土粘土・へら
10～1	（本題材）○○な焼き物ダルマ	信楽粘土（特練赤・白）・透明釉薬・上絵の具・たたら板

(5) 題材について

本題材は自分たちが学ぶ三原市の民芸品である三原達磨を陶芸用粘土を使って作る活動である。単元名の○○の中には「かっこいい」「かわいい」「おもしろい」などの自分なりの目標を設定し活動に取り組む。陶芸用の粘土は火を通すことで初めに成形したときとは変わっていくという不思議さを感じることができるものである。学園内や自分が住んでいるところなどの土を混ぜて自分だけの年度を作りそれを使って成形していくことで活動により主体的にとりくめるようになる。作品完成までに，これまでに学習した技能を生かしたり，新しく学習した技能を組み合わせたりしながら表現に生かしていく。

(6) 児童について

対象学級の児童は，指示を落ち着いて聞き言われたことを確実にこなすことはできる。しかし，自ら積極的に題材にかかわったり，発想したりすることは苦手である。アンケート(平成23年４月実施)でも初めての題材に抵抗を感じている児童が 50％以上いた。これまでの活動では５月に「土って気持ちがいいね」という題材で，土の感触を楽しんでいる。また，６月には「紙粘土をつくろう」で身近にあるものから材料を作り作品を作る経験をしている。これまでの活動で，土に親しんだり，粘土を自分で作ったりすることには慣れてきている。陶芸用粘土を使うのはこれが初めてである。

(7) 題材の目標について

○　粘土の感触を楽しみながら，意欲を持って活動に取り組むことができるようにする。

○　自分の目標に合った達磨を工夫するようにする。

○　成形の基礎的な技能を身につけ，自分のイメージに合った技法や材料を選んで表現に生かすようにする。

○　作品の色・形・模様のバランスなどを考え，身の回りにある焼き物に対する見方を広げることができるようにする。

(8) 学習計画

第１次　神明市の様子を調べ創造を膨らませよう（２時間）

・神明市の映像からダルマに興味を持ち三原達磨について調べよう。

・調べたことをもとにイメージマップを作ろう。

第２次　自分だけの焼き物達磨を作ろう（２時間）

第３次　附属三原ダルマ市を開こう（１時間）

単元は全５時間である。第１次では神明市の映像からこれまでの経験を話し合う中で意欲関心をもたせる。また，調べることで知らなかったことを見つけさせる。また，イメージマップを書き創造を膨らませる。

第２次では，第１次の活動をもとに実際に創作活動に入る。

第３次では，それぞれが作ったものを並べて附属三原版神明市を開く。

4，授業の実際

【具体的方策①の実際】

①活動までに題材に関連した活動を意図的に行う

粘土を扱う活動の前に，泥遊びをする活動を「土は友だち」と題して行った。校舎裏の広い畑を使って行うことで開放感の中で活動に取り組みやすくした。また，裸足になって土の感触を体全体でとらえられるようにした。最初は抵抗がある児童も見られた。しかし，周囲で川を作ったり，水を含ませて泥にしてお城や山などを作ったりする児童が増えるにつれて，誘われるように活動に入り込んでいくことができていた。

事後の児童の感想には「はじめはぶにゅぶにゅで気持ち悪かったけど，慣れてきたら気持ちよくなってきた。」「水を混ぜたら粘土みたいに固めることができたので，いろんなものを作ってみたよ。」などの感想が見られ活動を楽しんだ様子が伺われた。アンケートでは，全員が「とっても楽しかった」あるいは「楽しかった」と答えており粘土造形への意欲付けにつながった。

また，このような関連付けた題材は少しずつ内容が高次化するように組み込んでいっている。

図３　泥遊びをしている様子

【具体的方策②の実際】

②イメージマップをつくりイメージを広げる

イメージマップは図画工作科以外の教科・領域で活用してきており，児童にとっては抵抗なく行うことができるものである。題材についての児童のはじめのイメージがどのようなものかを図る上でもとても重要な資料となるものである。

まず個人でワークシートにダルマから思いつくことを自由に書かせた。ここでは特に色や形，特徴などの造形要素に限定させることなく自由に書くことを目的とした。普段あまりなじみのないものであるためか出だしは鈍かったが，近くの児童と交流する時間を設けることでイメージが広がっていった。後で述べる具体的方策③の活動の後ではさらにイメージが広がった。また，色や形ダルマの特徴など造形要素に着目してイメージマップに書き込んでいく児童が増え，実際に作るときに活用できるイメージマップ作りになっていった児童が多かった。

【具体的方策③の実際】

③題材について調べる活動を行う

これまでは題材に対する児童の持っている限られたイメージから活動を始めることが多かったため生活経験の差が大きく活動に対する意欲や関心にもばらつきが見られた。そこで，題材のもととなる三原達磨について調べる時間をとった。調べていく中で三原達磨には以下の３つの特徴があることを見つけた。

○鉢巻をしていること

○はじめから目が入っていること

○中に小石が入っておりそれが鳴ることで願いが成るという意味がこめられていること

これに関連して，三原の特産であるたこの形をしたものや変わった面白い達磨があることを見つける児童もいた。

【具体的方策④の実際】

④目標を自分で設定して活動に取り組む

「○○な動物」や「○○なダルマ」というように○○にあたる部分を自分で設定することによって造形要素に着目した活動を意欲的に行うことができると考えた。「はじめに」でも述べたように生涯にわたって主体的に美的活動にかかわっていくためには，させられるのではなく，目的や意図を持って題材に取り組む態度が大切だと考える。自分で目標を設定すれば，それを達成するための工夫も何となくや思いつきの工夫ではなく，○○らしく見せるための意図のある工夫となる。それが実際の造形活動でも意識され，さらには，できあがってからの鑑賞活動においてもその視点が継

続されるのである。自分で目標設定することによって，最後まで意欲を維持していくことができると考える。本題材では，○○の中に，「強そうなだるま」と入れたり，「いらっしゃいだるま」と入れたりしていた。「強そうな」と入れた児童は「強そう」に見えるための工夫をワークシートに書き込み，「いらっしゃい」と入れた児童は歓迎しているように見えるための工夫を具体的に書き込んでいくことができていた。することが明確になることによってモチベーションを維持していくことができていた。

図４　児童の作品

５，結果

アンケートは表３にある７項目を「とてもそう思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の４件法で行った。実施時期は４月，12月である。

表３　アンケート項目

1	図工で作る活動が好きですか
2	作り始めるときにやってみたいなと思うことはありますか。
3	作りたいものをすぐにイメージできますか。
4	作り始めるときにどうしたらよいかわからなくて困ることがありますか。
5	作るときに「ああしよう」とか「こうしよう」など心の動きがありますか。
6	作ることを通して「これは好きだな」と思うことがありますか。
7	自分で作るものを決めたりやり方を決めたりして作ろうとしていますか。

今回は情意領域に焦点を当てて研究を進めているため，情意領域にかかわるもののみを取り上げて分析する。また，表現活動の中でも作る活動に限定して問うている。その理由は，改善のための手立てを作る活動に重点を置いて実施してきたためである。

分析の手続きとして，まず，上記の４件法で尋ねられた学習の到達度に関する自己評価の回答を，「とてもそう思う」：４点，「そう思う」：３点，「あまりそう思わない」：２点，「そう思わない」：１点と得点化した。そして，それぞれの項目の平均値を４月と12月とで比較した。その結果を示したのが表４である。$p<.001$ を有意であるとする。

表４　項目別自己評価の変化

質問		4月	12月	t値		自由度
1	平均値	3.52	3.86	3.62	*	37
	標準偏差	0.6	0.34			
2	平均値	3.36	3.81	4.96	*	37
	標準偏差	0.54	0.39			
3	平均値	3.21	3.44	2.47		37
	標準偏差	0.7	0.64			
4	平均値	2.63	2.1	3.91	*	37
	標準偏差	0.54	0.83			
5	平均値	3.68	3.65	0.32		37
	標準偏差	0.47	0.48			
6	平均値	3.47	3.57	2.08		37
	標準偏差	0.64	0.64			
7	平均値	2.89	3.39	4.04	*	37
	標準偏差	0.79	0.49			

*：$p<.001$

分析の結果，項目１・項目２・項目４・項目７において有意な結果を得られた。

６，考察

項目１より，図画工作科の活動の中で作る活動が好きな児童が12月の時点では3.8ポイントを越えており，非常に高くなっている。これは本研究のために行った具体的方策のそれぞれが総合的に働き，児童の図工に対する意欲を向上させたことを示している。

項目２も3.35から3.82へ0.47改善し有意な結果を得られた。これは，具体的方策１「活動までに題材に関連した活動を意図的に行う」の取り組みの効果と考える。題材を関連付けて配列すると

同時に，少しずつ高次化することによって中学年での活動につながるようにしている。同じことを繰り返して行っていると飽きてしまい意欲の低下を招くという危険性があるが，少しずつレベルアップさせていくことでチャレンジしてみたいという思いを持たせることができた。また，関連付けた内容を行うので，技術的な技能を身につけており，そのチャレンジを支えることができた。

項目４は 2.63 から 2.11 へ 0.52 改善している。これは具体的方策３「題材について調べる活動を行う」の取り組みの効果と考える。題材からいきなり作り出すのではなく，調べる活動をすることによって，より題材に接近し取り掛かりを作ることができたと考えられる。

項目７は 2.89 から 3.40 へ 0.51 改善している。これは具体的方策４「目標を自分で設定して活動に取り組む」の取り組みの効果と考える。自分で○○に当たる部分を考える際には，ただ適当に当てはめるのではなく何らかの思い入れが発生しているはずである。また，それを達成するための工夫も同時に考えることにもなり，活動の見通しを持つことができるようになり，意欲の持続につながっていくと考える。

項目３では 3.20 から 3.45 と 0.25 の改善であり有意なものとは言えない。具体的方策２のイメージマップの導入によって作りたいものが見つからない児童の躓きの克服を考えていたのだが，直接効果があったかどうかは今のところわからない。

項目５・６については改善が見られなかった。これは心の中の動きを問うた項目であり，低学年段階では，まだ自分の心の動きなどを明確に意識することは難しいことをあらわしているのではないだろうか。この点については，中・高学年での実践の際に再度取り組んでいく必要がある。

７，終わりに

昨年度の研究から図画工作科におけるつまずきを克服するための手立てが有効に働いた部分とそうでない部分が明らかになった。昨年度の研究は４つの領域のすべてにわたって言及しており，焦点がぼやけてしまった。そこで今年度は昨年度十分に成果を出せなかった領域である情意領域に絞って研究してきた。題材によって差はあるものの，何の具体的方策もなく題材に出会わせても児童の意欲や関心を高めることはできない。逆を言えば，具体的方策を行うことが意欲・関心を高めること分かった。今回行った４つの具体的方策のうち，３つは有効に働いたと言えるだろう。題材によっては他の具体的方策が有効になってくるものもあるだろう。

今後も児童の意欲・関心を高めるための具体的方策を研究し，「図画工作科が大好きだ」という児童を増やしていきたい。

＜注および引用文献＞

1)　文部科学省：「小学校指導要領解説　図画工作編」p. 5，2008，日本文教出版株式会社.
2)　前掲書 1)
3)　吉川和生：「広島大学附属三原学校園研究紀要第１集」，p. 93，2011.
4)　相田盛二：「図画工作科の個別化・個性化指導」，p. 19，1987，明治図書出版.
5)　中村和世・大和浩子・中島敦夫・吉川和生：「図画工作・美術科における『ブルームのタキソノミー改訂版』の活用に関する考察」，学校教育実践学研究，2010.